

ドイツの歌詞と韻律

近代ドイツの音楽作品の歌詞は原則として韻文である。

前近代ではその限りではない。(例：ハインリッヒ・シュッツは聖書の多くの散文歌詞を作曲した。) また現代でもその限りではない。(また、現代のドイツ文学では韻文と散文の境界線も曖昧である。) ただしポピュラー音楽では現代にも韻文歌詞が圧倒的に多い。

ドイツ語の韻文の特徴

韻文には種類が多いが、ここでは歌曲(芸術歌曲、讃美歌、民謡、オペラのアリア、学生歌、ポピュラーソング等)にもっとも一般的に扱われている韻文だけを説明する。その特徴は

- ・言葉が詩行 (Verszeilen) と節 (「せつ」、Strophen) で形式的に区切られていること
- ・強弱の音節 (Silben) が整えられていること
- ・脚韻 (Reim) を踏んでいること

である。

韻文の特定の表記法

韻文を譜面の下ではなく独立した詩 (Gedicht) として表記する場合、手書きにしても印刷物にしても、詩行毎に改行し、節と節の間に1行を空ける。また多くの詩集には各詩行を頭文字から始める習慣が見られる。(ただしドイツの讃美歌の歌詞は節・詩行・脚韻を有する韻文だが、讃美歌集には伝統的に詩行毎に改行せず、散文のように続けて表記することになっている。)

強弱の音節の整え方

与えられた詩の形式を理解するにはまず、強弱の音節がどのように整えられているかを確認する必要がある。ドイツ語を母国語とする人から見ればそれはほとんど「言語感覚」で解決する問題ですが、ドイツ語を外国語として学ぶ学習者から見ればもっとも厄介な問題は、どの音節が「強音節」(Hebung) として認められるかを定めることである。その問題が解決しなければ詩の適切な朗読も歌曲の音楽的な解釈も不可能である。

詩の中で形式的に「強音節」と見なされる音節は、散文として読み上げられたドイツ語の文の「アクセント付き」の音節(「強勢アクセント」とある程度一致しているが、完全に同一ではない)。

(a) 二つ以上の音節から構成される単語では、辞書に明記されている「強勢アクセント」は詩の中でも原則的に「強音節」になる。また、一音節語が複数続く場合は、意味を持つ単語を強音節と見なす場合が多い。(例えば一音節語である名詞に定冠詞や一音節の前置詞などが付く場合は、定冠詞や前置詞が弱音節 (Senkung)、名詞が強音節になる。)

例1 : Vórwárts die Rósse tráben,
lústig schméttert das Hórn.

それ以外の一音節語、または三つ以上の音節から構成される音節においてアクセントを持たない音節については、まず「強音節になる資格も弱音節になる資格も持つ」と見なすのが良い。

(b) 同じ詩行の中では、強音節が二つ以上続くことがない。つまり、強音節になる資格を持つ音節が続く場合には、その一方が弱音節と見なされる。

例 2 : Die ihr nicht mitfahren wöllt! または Die ihr nicht mitfahren wöllt!

複数の読み方の可能性があってその複数の可能性からの選択が朗読者（または作曲家）に任されている場合もありますが、例 2 の場合には後では別のルールによって正しい読み方が決まる。

(c) 弱音節は 3 つ以上続かない。つまり、弱音節と見なされる資格を持つ音節が 3 つ以上続く場合には、その中のいずれかが強音節と見なされる。強音節と強音節の間に弱音節の資格を持つ音節がちょうど 3 つ続く場合には (b) のルールも当てはまるので必然的にその真ん中の音節が強音節になる。

例 3 : ich wäre ja so gerne noch geblieben

弱音節の資格を持つ音節が多すぎて今まで学んだルールで解決しない場合もある。

例 4 : Flöten hör' ich und Geigen, または Flöten hör' ich und Geigen,

Pöstillion in der Schänke または Pöstillion in der Schänke

この二つの事例では詩のみを見ればどちらが正しいか判断が付かないが、音楽のアクセントを見れば作曲家がいずれの場合も後者を選んだと分かる。

(d) 詩行は「強弱」の 2 音節で始まる場合と「弱強」の 2 音節（まれに「弱弱強」の 3 音節）で始まる場合がある。前者は「強弱格の韻律」(trochäisches Metrum)、後者は「弱強格の韻律」

(jambisches Metrum) と言う。普通は一篇の詩の中で強弱格と弱強格を混ぜない。(ただし Hoch auf dem gelben Wagen には各節の第七詩行に例外がある。) しかし少なくとも詩行の始まるパターンは全ての節に統一される（つまり第一節の第一行が強弱格だったら第二節以下のそれぞれの第一行も強弱格になる。第一行以外の詩行についても同じ。）

Hoch auf dem gelben Wagen の場合は第一節の冒頭部が曖昧で、強弱格なのか弱強格なのか定めにくい、第二節、第三節では明らかに強弱格だと分かる（例 4 を参照）。従って第一節の冒頭部も同じく強弱格として分析される。

例 5 Höch auf dem gelben Wägen

この (d) のルールによって例 2 の詩行で迷っていた読み方の問題も解決する。つまりこの詩が原則的に強弱格であり、またこの詩行が第四節の第六詩行であるが、第一節の第六詩行が (a) のルールに従って間違いなく強弱格なので、第四節の第六詩行も必然的に強弱格になる。前者の読み方が正しく、後者の読み方が誤っている、ということである。

(e) 詩行は「強弱」の 2 音節で終わる場合と（弱音節に続く）「強」の 1 音節で終わる場合がある。

前者を「女性終止」(weiblicher Schluss)、後者を「男性終止」(männlicher Schluss)という。Hoch auf dem gelben Wagen にも見られるように、その両方を交替させる詩が多い。またこの終わり方のパターンは全ての節で統一させられる。(Hoch auf dem gelben Wagen では 女性・男性のパターンが四回、または第七行と第八行の繰り返しを数えれば五回繰り返されています。)

(f) ルール (d)と(e)の区別以外にもっとも重要なのは1行当たりの強音節の数 (Zahl der Hebungen) である。この3つが1詩行の形式を構成している。

(g) 韻律の形式にはさらに弱音節の数も決まっていて、全体の音節数が形式的に決まる場合も多いが(例えばほとんどの讚美歌)、Hoch auf dem gelben Wagen の例が示しているように強音節と強音節の間に任意で1つまたは2つの弱音節が入り、詩行の音節数が不規則的に変動する詩もまた多い。

節の構造

「有節の詩」はこの名称の通りに複数の節に分かれるが、各々の節は原則としてそれぞれ同じ形式 (Form) を持つ。その形式は

- ・ 詩行の数
- ・ それぞれの詩行の属性 (上記(d), (e), (f)で述べた形式面)
- ・ 詩行と詩行の間の脚韻関係

という性質によって特徴付けられ、その性質は最初から最後まで変わらず全ての節に繰り返される。

Hoch auf dem gelben Wagen の場合は以下のようになります

第一、第三、第五詩行は強弱格、女性終止、三つの強音節

第二、第四、第六、第八詩行は強弱格、男性終止、三つの強音節

第七詩行は弱強格、女性終止、四つの強音節

第九、第十詩行は第七、第八の詩行の繰り返し (この繰り返しは元の詩になく、作曲家が加えたものである)

現行の形では第四節の第七詩行は四つではなく、五つの強音節を持っている (例3を参照)。ただしこれは国民が歌ったことによる変化で、元の作品にはない不規則性である。

脚韻の踏み方

原則として詩行の終止で脚韻を踏む。脚韻は

- ・ 一音節韻 (男性終止の場合) と
- ・ 二音節韻 (女性終止の場合)

の2種類に分かれる。

一音節韻では男性終止で終わる2つの詩行のそれぞれ最後の音節が別々の子音から始まる (下記の例の yorn、Horn) が、類似する母音と子音で終わる (vorn / Horn)。

二音節韻の場合は最後の強音節が一音節韻と同じ扱いで（下記の例では Wagen、traben）、その後の弱音節は同じ響きを持つものでなければならない。この事例ではめずらしく不完全であるが（Wagen、traben）。

例：Hoch auf dem Wagen の最初の四行

Hóch auf dem gélben Wágen
Sítz ich beim Schwáger vórn.
Vórwárts die Rósse tráben,
Lústig schméttert das Hórn.